

打算について

打算という言葉がある。利害・損得を計算することである。しかし、打算の最大の弱点は、その計算が「目先」にしか及んでいないこと。長い目で見れば、計算違い（誤算）である場合が多いということなのだ。

目先の利害・損得を計算して行われた開発は、地球破壊という人類全体の不幸につながり、目先の利害・損得を計算して建設された原発は、放射能汚染という取り返しのつかない代償を生んだ。その時には正しいとしか考えられなかった打算が、実はたいへんな誤算であったことを、人々は後になって気づかされるのだ。

以前、3年生のある生徒から、こんな質問を受けたことがある。

国語は受験に必要ないので、授業中、他の教科の勉強をしてもいいでしょうか？

あきれ果て、不覚にも動揺した私は、何の説明もなくダメだと答えた。えっ、どうしてですか？私のもう一回、ダメだ、と答えるしかなかった。だって、受験には一切必要ないんです……ダメなものはダメだ。納得できない彼はそれでも食い下がろうとしたが、不毛のやりとりを続ける気にもならず、私は無言でその場を離れたのだ。

NHK 大河ドラマの『八重の桜』は、同志社大学を創設した新島襄の妻、八重の生涯を描いた物語である。会津鶴ヶ城下の砲術師範の家に生まれた八重の幼少期が描かれる中で、会津藩の庭の教えとしてしばしば登場する言葉があった。

「ならぬことはならぬのです」

どうしてそれがダメなのかという理屈ではなく、ダメなものはダメなのだ、という有無を言わせぬ教えである。

フロイトはこのような心の働きを“超自我 super-ego”と呼んだ。倫理観、良心、宗教、ルール、^{タブー}禁忌、理想我……それは、快感原則に支配されて「あれをしたい」「これはしたくない」とわがままを言う“自我 ego”と、「メシ食いたい」「眠たい」（時には「誰かを攻撃したい＝Thanatos」）などと訴えてくる本能などの“イド Id”の衝動を抑え付けるメンタリティである。そして、この“超自我”を健全に発達させることなく成長した心は、大人になっても「あれをしたい」「これはしたくない」「メシ食いたい」「眠たい」（時には「誰かを攻撃したい」）などの欲求をコントロールできないのだ。

授業中に他の教科を勉強しなくなったら、その計算が誤算であることに思い至りなさい。高校では、「大学に合格する」ことだけを目的にするには、あまりにも尊く大切な営みが行われている。そのことに、今は気づけないだけなのだ。ダメなものはダメ。年長者の経験則に従って、言うことを聞いておいた方がためになるぞ、と言っているのではない。それは普遍的に動かしがたい真理だから「従いなさい」と言っているのだ。

判断に迷ったときは、人として正しいかどうかを考えることにしている 稲盛和夫